

---

# キミがいたから僕がいた。

祭禅雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミがいたから僕がいた。

### 【Nコード】

N2617L

### 【作者名】

祭禅雪

### 【あらすじ】

主人公の麻吉は学校に行くのが面倒だった。

だがそれは、ある日をさかいにその考えが消えうせてしまった。

麻吉の学校に転校生が……。

その子の名前は「零」れい。

麻吉はその日から彼女の事が忘れられない。

この気持ちがないのか、そればかり考える。

話したこともない、目も会ったこともない。

そんな彼女たち二人を巻き込んでクラスメイトが何かを起こしたり

起こさなかったり、そんな物語

## プロローグ

小学校でキミと出会って中学校で離れ離れで、高校生では、関わりがなくなつて・・・。

そんな未来なんて嫌だよ？

でも、未だに話しかけられない僕が居る・・・。

いつかキミと話せますように・・・。

・・・

学校なんて詰まんない物だつて思つてた。

でもそれは昨日までで・・・。

キミが転校してきてから、学校に来る意味が出来た。

そのひから僕は毎日キミに会うために学校に来る。

まだ、話したことはないけれどいつか話せるときがくるかもしれない。

だから、絶対離れ離れになりませんように……。

・・・

## ブログ（後書き）

麻吉が零が転校してきてしばらくたってから考えたことと転校してきてすぐに考えたことを書いて見ました。

えと、文才なんてないので、読みにくいと思いますが、どうぞよろしく願います。

## その01：転校生。

何で今日に限ってこんなに朝のホームルームだっけ？が長いのに……授業中寝たいのに……。

てか何で1時間目もホームルームなわけ？

どうせなら自習にしろよぉ……。

そしたら先生いないから眠れるのに……。

あー……もういいや眠いから寝る。

「ちよ、麻吉なに寝ようとしてるのっ」

「ええ？だって眠いんだもん……」

「転校生来るんだからちゃんと起きてなさい」

「え？もしかして自習がホームルームになったのってそれが原因？」

「じゃない？って麻吉、だからって転校生のせいにしないでよ？てゆうか寝るほうが可笑しいんだから」

「はいはい、どうせ僕は可笑しいですよ！」

「はぁ？別にそんな強く言わなくていいじゃん！」

あ……やつちゃった。

はい、みんな見てるねー。

眠れないじゃないか！

どうして叫ばせてくれちゃってんだ！

菜々め……わざとか……。

「おい、櫻に日下部！転校生が入りにくいだろ！」

「先生、ねむ……違う違う、体調悪いので保健室で寝てきても良いですかあ？」

「麻吉……いいかげんにしてよね」

「あー、もう二人とも座れ！はい、転校生の斉藤零さんだ」

「ちよ、まだ僕座ってないって」

「座れよ……」

「あ、はい」

ええ……しらけたんですけど。

受けるとも思ってたなかったけどねー。

ここまでとわ。

いや、語尾に「w」をつけたくなるね。

あ……も、無理寝……r

「斉藤、自己紹介を頼む」

「ちよ、先生！麻吉が寝たんなんですけど！」

「日下部、まずは転校生だ」

「いいんですか？」

「いつものことだろ」

「ですよね」

何で麻吉寝るかな……。

自己紹介くらい聞いてあげなつて……。

あー、今が授業じゃなかったら写真取れたんだけどな。

てゆうかこの子鈍感すぎるよね。

下級生にも同級生にも上級生にも人気なのに。

寝顔可愛いんだよね。

ま、私にしか見えないってわけじゃないからって早速赤面してる子が。

男女共にいる。

モテすぎでしょ麻吉。

慣れてる私は全然なんだけどなー……この子を好きになる子が分らない。

って自己紹介聞かないと。

「えーと、斉藤零です。この地域に来たことが全くないので、一緒に学校来てくれる人がいたら嬉しいです。分らない事だらけで、不安なので皆さん仲良くしてくださいね」

転校生声可愛い！

見た目も可愛いし・・・この子男装した麻吉と滅茶苦茶おっつてこんなこと考えてるってバレたら麻吉に殺される・・・。

「あー、席は櫻の隣な。一番後ろの窓際で寝てる奴のが櫻麻吉だ。授業中寝てたとしても起こす役は日下部だからな。無理に起こすとあいつキれるから。あ、日下部っていうのは櫻の隣の隣だ。分ったか？」

「はい、先生ありがとうございます」

笑顔可愛い！

あの子歌歌えないかな・・・。  
ていうか5年生であの背の高さって、ああ、まだ成長するよね。  
麻吉なんてもう160なのに・・・135くらい？25センチさって。

「よし。じゃあ、斉藤に質問しとけ、じゃあ先生は出張だから  
『はい』」

ガラー・・・

「誰だ余計な効果音付ける馬鹿は！」

「そんなの一人しか居ないです。先生、私、渚です！」

「あーもう、じゃあ、委員長とかその他頼んだぞ！それと日下部！



櫻起こしとけ！」

「めんど・・・ああなんでもないです、喜んで引き受けます！」

「よっし、じゃあ菜々、麻吉ちゃん起こしてあげてー」

「いや、麻吉寝たばっか・・・ああ、皆寝顔みたいの？麻吉に言っちゃうよ？」

クラスメイトがそのままにしといてやれよ、とか講義の声をしたため菜々が確信をつく言葉を言う。

麻吉は自分の寝顔を見られるとキレる、なのに寝る・・・ちよつと可笑しい子と思われる時があるが、学校全員から人気なためそんな考えをするやつは一瞬でその考えを更正させる、それほど人気ならしい・・・。

「麻吉、起きろ、じゃないと借りてたゲーム壊すから」

「人のゲームを壊すなー！！」

「はい、渚。起きたみただよ」

「え？何？あ、転校生の質問コーナー的なものですか。じゃあ僕は保健室に・・・」

「麻吉ちゃん、駄目だからー。これはクラスでやるものです」

「渚いたの？」

「ひどっ。麻吉ちゃんひどいー！」

「え？だって昨日深夜実況動画とってたのによく元気だね」

「あー、二人とも？転校生忘れてない？」

「あ、私の事はいいですよ？見てて楽しいので」

「後は私と渚と麻吉の自己紹介だけだから」

その言葉を聞いた瞬間嫌な顔をする麻吉。

転校生が気を使ったらどうするんだ、なんてツッコみが来そうな感じが漂っている。

渚と菜々の二人に睨まれて、観念したのかしぶしぶうなずいて教室

の中心に戻ってくる。  
というか、いつの間にドアの前までいったんだ……。

「私は日下部菜々。いつもこの馬鹿を起こしてます。趣味はキーボードです」

「山川渚です！えーと、菜々ちゃんと麻吉ちゃんとは親友兼幼馴染です！趣味はベースです」

「あ……僕ですか。櫻麻吉です。趣味はドラムとアニメ鑑賞。ま、よろしくね？」

愛想笑を転校生にするなよ、麻吉。

転校生若干赤面してるよ……ってあれ？

赤面からすぐ笑顔に変わってる。

もしかして人見知りかな？

「そうそう、麻吉ちゃん！零ちゃんね、ギターできるんだって」

「で？」

「で？って反応薄いよ。えと、C組みの紗希ちゃんと5人でバンド組まないかっていう話をしてただけど、どうかな？」

「僕すではいつてるわけ？」

「あ、嫌なら私は別にいいですよ？」

「……」

「麻吉、私を見られても困るんだけど……」

「まさかですけど？今年の文化祭出る気ですか？」

「そのまさかだよ麻吉ちゃん！去年は麻吉ちゃんが嫌がったけど、今年は無理にでも参加！」

「……別にいいけど？去年は僕、体調悪かったから断っただけだし、ボーカルが増えるなら歓迎。ギター弾けるって言うならもつと歓迎」

「じゃあ、櫻さんのこと麻吉って呼んでもいいかな？」

「ふえ？あ、いいいいよ、どうぞ」

え、転校生に名前呼ばれて照れてる・・・？

あ、この子麻吉にフラグ立てたか。

麻吉が人をすきなるといいな・・・。

同姓でもいいから人を好きになる意味を知ってもらいたいから。

その01：転校生。（後書き）

はい、すみません！

親が僕の小説のストック全て消しちゃいました！

間違えて削除したらしいです・・・。

毎日一話ずつ更新しようとしてたのに・・・。

なので、ストック溜まるまで待つてください。

次の更新は夏休み中ですね・・・。

で、もう一個小説溜まってるのでそっちをやります。

すみませんでしたっ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2617/>

---

キミがいたから僕がいた。

2010年10月9日16時42分発行